

「象る」制作論 論文要旨

要旨 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程

美術専攻油画研究領域(壁画)

1318907 高橋臨太郎

私の制作は場所との結びつきから始まる。足裏が接している地面、この素朴だが、確かな実感を生む接触がなければ制作の動機や、表現への欲望が生まれない。

わたしは、地に接することで裏返ってくる、どうしてもなくそこにあるわたしの身体を感覚する。そして他に触発された瞬発的な身体の反応や、変容する音を「聞く」ことでわたし自身を象っている。

本論文は、自身の身体感覚を起点としてパフォーマンス、映像、立体などの美術作品を制作する筆者の制作論である。その中でも、対象を「象る(かたどる)」ことの働きについて焦点を当て論じるものである。

端的にいうと、私は作品制作において異なるもの同士の接触が生む未分化な感覚を象る。私たちは異なるものに出会うと何か言い表せない感覚を持つだろう。それにあたる適当な言葉や概念が見つからない場合、それに変わる何かを手さぐりに探す。それは接触した対象、それをとりまく環境や状況に見出される。身体と密接に関係した記号過程であり、あたかも触れたり、受け渡したり、時には手にした途端に消えてしまったり、触れるたび形状が変化していくような生き生きとした記号である。その働きの中で、お互いは相互に象り合い、そしてだんだんとそれぞれの内面になじみのある形に生成される。それは次第に私たちがよく知る、記号、言語、象徴として身体と切り離され、初めからあったかのように汎用化される。しかしそれらが元々は他との出会いで生じた未分化な感覚からきているはずであることは次第に見えなくなる。私が目指し象ろうとするのは、その接触の瞬間であり、双方がぎこちなく緊張し、焦点の定まらない、手付かずの瞬間を「象る」ことを目的としている。私の作品の多くは、そんな不可分な感覚を、わたしの身体の荒々しい歪みを「聞く」ことを通していかに象っていくのかを制作としている。

私の制作は、私の身体を機軸に、様々な場所や状況に入り込んでいく。機織り工場や、高速道路、ダム湖など、何かと何かの狭間で結界の緊張感を持った非人間的な辺境に一つの「音」として介入していく。私とその境界を逡巡し、行き来することを通して分断していたものたちが重なりあう。

第一章では身体における接触が起こす意識の現れが、どのように象るという働きに関係してくるのかを論じる。哲学者ミシェル・セールの「混合体」の概念をそのヒントとして論じる。彼はその著書「五感」の中で、「中指で、私は自分の片方の唇に触れる。この接触の中に意識は住まっている。」(“五感 p24.)と記している。

一つの身体の中でも、触れるものと、触れられるものに振り分けられ、その触れ方によっては、主体と客体が交互に入れ変わる。この接触による主客の往還のなかに初めて意識が生じることになる。私はこれを異なるもの同士の接触にも固有の意識は生じるのではないかと解釈した。

それは出入りすることのできる一つの自由な「場」として象られる。そして、わたしの制作の原点となる、素朴な接触を引き起こした具体的な地面や、空間、ものなどの媒質を皮膚として拡張し、紐解きながら作品化していく経緯を語る。

第二章では、「聞く」ことに焦点を当てて論じる。具体的な場所へ「演奏」を通し介入し、前節で触れた接触における主客の反転や混じり合いなどが、「聞く」わたしと、「弾く」わたしの重なり合いを通して象られていく制作過程を論じる。

出展作品でもある「Scale Here」は首都高速道路を走行するトラックの荷台で筆者が都市のリズムとともにドラムを演奏した実践の記録である。半透明のホロに囲われた荷台の中では、通り過ぎる街灯の点滅や、突き上げてくる路面の凸凹、左右からの遠心力などの抽象化された都市が入り込んでくる。都市に対して、弱々しく客体にもなれないわたしが映し出されるが、そうなることで初めて都市との間に生じるグルーブについて記述していく。

第三章では、わたしの原初の記憶を巡る。幼少期に阿蘇山の麓での乗馬をした記憶が、大地と身がその経験の中に「象り」の核心部分へと論を進め結びとする。